

# 風知草

山田孝男

「原発ゼロ」は東京都知事選（2月9日）の争点にふさわしいか――。

世論は歩み寄りの余地がないほど割れているが、先週末、近所の映画館で遅ればせながら見た映画「ハンナ・アーレント」（2012年）が重要な視点を提供していると思った。

## 思考停止から抜け出せ

マン（1906〜62）の裁判を傍聴した。

アーレントは、アイヒマンを「どこにでもいる平凡な人物」と見た。戦時下では誰でもアイヒマンになり得たのであり、イスラエル

哲学者、アーレント（1906〜75）の、人間がなす悪についての考察が、原発と東京の有権者の責任という問題につながる――と

思われたのである。アーレントはドイツ系ユダヤ人女性だ。ナチスに追われ、アメリカへ亡命。第二次大戦後、ユダヤ人虐殺隊中佐、アドルフ・アイヒ



題字・絵 五十嵐晃

思考停止のまま、未完の巨大技術への依存を続けられ、時に途方もない惨害を招く。福島原発事故を見よ。直接被ばくによる死者こそ出なかったものの、故郷を追われた避難民は約14万人にのぼる。

そういう中で都知事選である。なるほど、エネルギーの選択は国策には違いない。だが、難しいことは国が決める、専門家が決める、上司が決める、オレは知らん、自分さえ無事なら後は野となれ山となれ、という構えでよいか。

現実の戦争だろうと、経済戦争だろうと、巨大なプロセスに巻き込まれるうちにモラルが見失われ、人をもとも思わぬ判断が繰り返されることがある。

アーレントは、ナチスに協力し、収容所への同胞の輸送に手を貸したユダヤ人指導者の責任も問うた。彼らは非力だったが、自ら虚心に考えれば、抵抗と協力の中間に別の道があったはずだ――と論じた。